

スクール・ギャップ

高校に入学し、新たな生活をスタートしてから、もう七ヶ月が過ぎようとしています。この七ヶ月間を、一言で言うところ「スクール・ギャップ」。そのことについて、話します。

私は、長崎県西海市の西側に浮かぶ、「江島」という小さな島の出身です。島の大きさは周囲四キロメートルで、約百八十人あまりの島民が暮らしています。島民の平均年齢は、なんと七十歳を超えています。子供の数は少なく、私が入学したときは全校生徒十一人だった中学校の生徒数も、卒業するときにはわずか二人になっていました。二人で何をするのかと思われるかもしれませんが。しかし二人だからこそ濃厚な学校生活を送れたとも言えます。なぜなら島の多くの方々が私たちの学校生活を支えてくれたからです。島の方々は毎日明るく声をかけてくれ、私の話相手にもなってくれました。そんな島の方々は、僕にとって友達のような存在だったのです。学校の文化祭や運動会は、島の方々もいっしょです。還暦をとくに過ぎている、おじいさん、おばあさんたちが、走ったり、踊ったり、歌ったりしていました。もちろん、僕たち生徒も頑張りました。二人で準備をし、話し合い、行事を作り上げていったのです。二人で劇、二人で演奏、二人で一輪車、二人で短距離走、とても難しかったです。しかし僕たちには島の方々がついてくれている、だからこそ自信を持って色々なことに取り組んでいこう、そういう

た気持ちで生活していました。

私にとって江島で生活した十五年間は島の方々の温かい愛によって育てられた貴重な期間です。

やがて中学校を卒業し、フェリー乗り場から、島民全員に見送られ、私を育ててくれた温かい島をあとにしました。そのときの名残惜しさ、寂しさそして新たな環境に対する期待感は今でも鮮明に覚えています。そして高校での生活。まず、びっくりしたのは、生徒の多さです。わずか二人の教室で学習していた私の目の前に、三十七人も生徒のごった返した教室があるのです。そんな教室は最初は窮屈でたまりませんでした。一学年二百七十九名、全校生は八百二十六名、ただただ驚くばかりでした。

私の成績は中学校時代一番でした。一番と言っても二人中の一番です。しかし江島一の神童と自負していました。そんな私の鼻はあっさりと折られてしまいました。井戸の中の蛙がはじめて大海を見た状況です。四月当初の校内実力試験、百二十番、シヨックでした。打ち砕かれました。また運動をしてもそうでした。中学校時代は一番だった私の足の速さが、体育の授業を通してたいしたことないと思われたのです。今まで一対一の関係だった人間関係が、一気に一対二百七十八となったのです。そして自分は人より優れていると思っていた自分が実はたいしたことがないと思われたのです。そのギャップとシヨックとが私の高校生活を不安で無気

力なものにしてしまいました。相対的な自己評価というものは実に残酷で島で抱いていた自身自身の価値観を一変させてしまいました。

そんな高校生活の中、担任の先生にこう切り出されました。「下宿生はきちんと管理してもらえない部に入らないと生活が乱れてしまい、故郷の両親を泣かせてしまうかもしれないぞ。俺が面倒を見てやる。ソフトでいい仲間を作ってみないか」と。私は先生の熱さにひかれ、ソフトボール部に入部することにしました。ソフトボール部は平成十五年度のインターハイ優勝チームであり、とても厳しい練習で有名です。夏の練習は暑く苦しく、皆、吐くほどです。遠征・合宿が多く、技術面から生活面、学習面まで厳しく指導されます。この厳しい部で私を支えてくれたのが一緒に入部した一年生です。ユーモアがあり、共に励まし合いながら頑張ることのできるかけがえのないチームメートたちです。顧問の先生も下宿生の私を厳しくも熱く支えてくださいました。そんな厳しい環境で生活をしている内に、「自分自身が全体の中でどれほど優れているか」ということよりも、「ちっぽけな自分が全体の中で何をなせるか」そういう発想が生まれてきたのです。

私はソフトボール部に入って本当によかったと思っています。みんなに支えられ、そして自分も為すべきことをなし、何かを成し遂げることのすばらしさ。その実感は他の活動でも私を

積極的になりました。体育大会の二百メートル競技で私は九人中五番でしたが、それよりも招集係としてみんなががんばり、大会を成功させたことに心から喜びを感じました。自分一人では決してできない大きなことをみんなで協力して達成することのうれしさ。それは、島での生活にも通じるものでした。

前にも述べたとおり十五年間私は、島の方々に支えられて生きてきました。同じように今私は、ソフトボール部の仲間、学級の仲間、そして先生方に支えられて生きています。私と直接関係する人の数は増えましたが、その向かうところは、個人ではどうしていきなり高いレベルの仕事全員で成し遂げることという点で一致していたのです。私を感じたスクールギャップの真裏には、どの場所でも、いつの時代でも変わらない「支え合い」という普遍的な真理が存在していたのです。今、私の胸の中ではある夢が膨らんでいます。「ソフトボール部全員で力を合わせ、全国大会の舞台を踏んでみたい。そして全国の頂点に立ってみたい。」